

防災教育の日

現実の災害時に役立つ 防災教育とは

例年通り、ゴールデンウィーク直前の土曜日4月26日、令和7年度の防災教育の日の訓練が実施された。この日は曇天、朝方は少し肌寒く感じるほどだった。三年前の2022年から、調布市の全小学校に対して一律に作成された訓練マニュアルに従い、各小学校の近くに住んでいる市職員を初動要員と定め、10数名の市職員が中心となって活動する形の防災訓練だ。今回の市統一テーマは避難所開設訓練と定め、災害発生時の初期対応に焦点が合わされている。

災害が市役所開庁時に発生した場合、布田小地区担当の市職員が駆け付けて避難所の開設に当たるが、閉庁している夜間や休日であれば初動要員が避難所開設を行うという想定だ。布田小学校門の開け方に始まり、体育館解錠の手順と進んでいくのだが、分かり難かったり間違えたりと言った小さなトラブルが起きるのは当たり前、そのための防災訓練なのだから。とは言いながら、全市一律のマニュアルなので各小学校特有の状況などは盛り込めないし、布田小に来るのは初めてという市職員の方もおいでだった。

防災教育の一環として、災害発生を想定して全校児童が校庭に一時避難し、連絡を受けた保護者が児童を引き取りに来るという訓練も行われ



体育館に配置された避難所備品を見学する皆さん

る。この訓練に参加した児童と保護者の方々に、避難所開設訓練で体育館内に設置したテントや簡易トイレ、段ボールベッドなどの避難所体験をしてもらったことも、防災教育の目的の一つだ。昨年は体育館にこうした避難所の設営がされていることを知らずに、そのまま帰宅してしまっことを保護者・児童が多かったことを踏まえ、体育館前で行わば呼び込みを実施。おかげで160名を超える見学者に体験してもらったことができた。土曜日とあって、男性の保護者と連れ立って訪れる児童も多く、避難所でプライバシーを確保するテントの中では、遊具感覚で走り回る姿が微笑ましい。最後のテーブルはお土産コーナーで、非常食のアルファ米や飲料水を選べるようになっており、年々新しくおいしい製品が出される非常食を持ち帰って体験できる。どうやら子供たちの一番人気はドライカレーのようだった。

子ども食堂 & やぎの放牧

子どもたちの思い出に なればいいな

5月17日の土曜日は朝から雨、でも気温は20度越えなので寒くはない。当地区協のプロジェクトの一つとして2018年から実施しているハッピー子ども食堂の第16回を、白山宮境内の布田南部自治会館二階で開催した。コロナの時期には大人数での会食が難しかったため、EZYランチパックの名称でレトルト食品やおやつを配るフー・ドントリリー形式のイベントに形を変えたが、昨年から子ども食堂も復活。現在はEZYランチパックとほぼ交代で実施している。いずれも中学生以下の子



どもと同伴の保護者が対象で、布田小や地区協ホームページでお知らせし、オンラインツールで申し込みをして頂く形式だ。

この日のメニューはキーマカレーにサラダ、ゼリーのデザート付きだ。11時半のオープンを目指して自治会館一階の狭いキッチンは大忙し、実行委員以外にも10名ほどのボランティアの助けも借りて、70人分を越す食事を当日朝から準備するのはなかなかの作業だ。

二階のテーブルはほぼ満席。一番乗りの女の子たちと同じように、近所の友達や同級生で連れ立って来た子どもグループが大半で、保護者はチラホラ。カレーのお代わりも出来るというので、嬉しいように列に並ぶ子も。実行委員は雨で出足が鈍る心配をしていたが、来場者が集中することもなく、適度に分散されて良かったと胸をなでおろしていた。また、受け付け机の横に置いた募金箱に、帰り際に小さなお財布から10円玉を入れてくれる子がいるのも、主催者には嬉しい励みだ。「明日は下布田遺跡でヤギさんとふれあいがあるよ」と、翌日のイベント告知ビラを渡して宣伝も抜け目なく。そのイベントは調布市郷土博物館と社会福祉協議会との協力で4年ほど行っている、下布田遺跡の除草を二頭のヤギにやってもらうプロジェクトの一環で、5月から8月までのヤギ除草期間中の日曜日3回、ヤギとのふれあい環境学習を開催するもの。当地区協メンバーも運営のお手伝いをしている。

前日の雨は上がったが、梅雨の終わりを思わせるような蒸し暑さとなった5月18日、二頭のヤギが日頃の除草場所から、分室建物裏手のふれあい会場に移動してきた。それだけでなく、子どもたちが餌としてヤギに食べさせるのに適した大きな草や、雑菌を持ち込まないようふれあい前に靴底を殺菌するマット、草むらから子ども達を狙っていきそうな虫を遠ざける蚊取り線香などなど、ふれあいと言っても念入りな準備が欠かせない。

ヤギのイベントは日曜日という日もあってか、保護者とい

地域の活躍びと

布田小の高学年生が毎年田植えや稲刈りでお世話になっている、斉藤農園に齊藤修太郎さんをお尋ねしたのは7月13日のお昼過ぎ。前週までの早すぎる猛暑が少し落ち着いた日曜日、午前中の農作業を終えた農業ボランティアの矢城敏一（やしろうと しかず）さん・溝上誠一（みぞがみ せいいち）さんと一緒に、農園脇の作業小屋で出迎えて下さった。

作業小屋の真ん中に置かれたテーブルを囲んで、早速お話をお聞きした。「あの頃の農業は3K職場の代表のように言われていましたよね」と、斉藤さんが職業としての農業を始められた20数年前の思い出から話された。まだ20代だった斉藤さんが突然農業を始めることになったきっかけは、お父様に連続して降りかかった仕事と健康上の災難だった。お父様は農業とは違う仕事を始められ、同時に田畑の大半を調布市の自然観察農園事業に貸与されて、児童館と共に健全育成活動としての農業体験「親子田んぼクラブ」を始められた方。当时は学校単位ではなく、公募で集まった小学3年生以上の児童とその保護者が対象で、農園長であるお父様と農園で作物をつくっている市民の会メンバーが、農作業の指導と日々の田んぼの管理作業を提供していたとのこと。同様の形は現在の布田小の稲作体験に引き継がれている。

突然の引退を余儀なくされたお父様に代わって、斉藤家の主となった修太郎さんにとって、それまで経験は

斉藤 修太郎さん

(さいとう しゅうたろう)



～斉藤農園～

していても農業を生業として選択する決断は生易しいものではなかったはずだ。農協の先輩や青壮年部の方々の助言・激励もあったそうだが、想像するに修太郎さんの血に流れているDNAが最後の一押しとして働いたのではなからうか。

その後、専業農家という調布市では決して多くはない事業を軌道に乗せたばかりでなく、生産技術の面でも経営面でもゆるぎない評価を得るようになるまでの苦労は、斉藤さんご自身は語ろうとされないが、「妻と家族には本当に感謝している」という言葉がそれを物語っていると思う。実際、斉藤さんは年間40～50品目に及ぶ農作物を栽培されており、いわゆる近郊農業として消費者に多種多様な品目を新鮮な状態で届けた実績に対して、東京都の表彰を受けている。また、最近では良質の白菜を収穫したことでも東京都知事賞を受賞されてい

る。これは、農業に最適とは言えないハケ下の土を、長年に渡って育ててきた成果として嬉しい、と斉藤さん。

最後に布田小の稲作実習についてお聞きしようと思ったが、筆者が以前から気になっていたことを聞いて見た。布田小の田んぼは、自然観察農園の流れもあり、斉藤さんは布田小開校と同時に入学した初代一年生でもあり、何より布田小から歩いてすぐでもあり、非常に分かりやすいが、隣に笹塚中学の田んぼがあるのはなぜですか、と。

それまでも時々斉藤さんとの会話に入ってきたりしていた農業ボランティアの矢城さんが、身を乗り出して来られた。実は矢城さんご自身が笹塚中ご出身。矢城さんよりも年上の方々が笹塚中のおやぎの会役員をされていた平成元年前後、笹塚中が荒れてしまいい、保護者としても具体的な行動を起こさなければ収拾できないという危機感を持って京王線に飛び乗り、23区を外れた最初の市である調布に降り立ち、調布市役所に相談に行ったのがそもその始まりだったという、テレビドラマにでもありそうなお話。ちょうどその頃、斉藤さんのお父様が自然観察農園を始められていたので、まさに渡りに船とばかりに笹塚中版の親子田んぼクラブが始まり、現在までその流れが引き継がれているのだ。

子ども達が健やかに育って欲しいと願う心は、斉藤さん父子にも農業ボランティアの方々にも、しっかりと根付いているのが頼もしく嬉しい限りだ。

(取材・藤田秀雄)



オリジナルの缶バッジを作成